

県境を越え課題解決

津山で4市町首長懇談会

登米市・栗原市・岩手県一関市・平泉町の「平成29年度第2回首長懇談会」は3月25日、登米市津山町の料理旅館三浦屋で開かれました。

懇談会は、人口減少、少子高齢化など、さまざまな課題を解決するため、4市町が県境を越えて実施している話し合いの場。4市町の首長は、それぞれの30年度の子算や今後の方向性や取り組みなどを説明し、情報を共有しました。熊谷市長は「中身の濃い話し合いができ、満足しています。人口減少対策や企業誘致など、「圏域で連携して取り組めるものは、より一層連携を深めていきたい」と力を込めました。



現在4市町は、観光インバウンド（海外旅行者の誘致）などで連携。今後は多方面で連携し、さらなる発展を目指します。

快適なまちに向けて

積水ハウス包括連携協定

市と積水ハウス仙台シャームゾン支店の「包括連携協定締結式」は3月14日、市役所迫庁舎で開かれ、市と積水ハウス仙台シャームゾン支店は、市内の住環境の整備やそれを通じた快適なまちづくりについて協定を結びました。

同社は、神奈川県清川村などとの間で同様の協定を結んでいます。本県自治体との協定締結は初めて。協定には、移住・定住住宅の整備、老朽化した市営住宅の再編や住環境整備を通じたまちづくり支援などが盛り込まれています。熊谷市長は「この連携を『住みたいまち登米』の実現につなげたい」と話していました。



協定書を手に、固く握手を交わす川村英史支店長(左)と熊谷市長。川村支店長は「登米市発展に協力したい」と語りました。

走り と 仮装 と 味満喫 風土マラソン&フェス



左：過去最多、約6千人が出場したマラソン。競技として走る人、風景と食を楽しむ人、仮装して盛り上げる人。風土マラソンには、さまざまな楽しみ方があります。中：エイドステーションでは、日本航空の客室乗務員が機内食「蔵王タルト」を配りました。右：ロックミュージシャンに扮して、マラソンを盛り上げるランナー。

東北の春フェス「東北風土マラソン&フェスティバル2018」(同実行委員会主催)は3月24、25の両日、長沼フットピア公園を主会場に開かれ、ランナーや来場者は東北の魅力を楽しみました。

マラソンは、24日のリレーマラソン、25日のフル、ハーフなど9部門に、17カ国からこれまで最多の約6千人が参加。ランナーたちは、コース内のエイドステーション(給水所)で、登米市名物のはっと、登米産牛のステーキ、南三陸町産めかぶのみそ汁や青森県産リンゴなど、東北の食を楽しみながら、春の長沼を駆け抜けました。お祭りランの本場、フランスのメドックマラソン同様、仮装するランナーも数多く参

加。今年のテーマは「ラン&ミュージック」で、アイドル、マイケル・ジャクソンやベートーベンなど、さまざまな仮装で見る者を楽しませました。

東北の特産品の飲食・物販ブースが並ぶ登米フードフェスティバルには、延べ約5万人が訪れ、東北の日本酒が勢ぞろいした東北日本酒フェスティバル、24日には、酒蔵見学や南三陸の沿岸部を巡る東北風土ツーリズムが同時開催。横浜市から参加した福井陵太郎君(9)は「トゥモローランで優勝できてうれしい。普段はラグビーをしています。マラソンも楽しかったです。食べ物もおいしかったので来年も出場したいです」と春の登米市に満足していました。

目で見て意識新たに

ジオラマを使い防災授業

「登米市段ボールジオラマ防災授業」(ボランティアサークルぴいす☆かんばに主催)は3月18日、迫公民館で開かれ、市内の中高校生11人が水害対策などについて学びました。

同防災授業は、子どもたちがまちの防災について学び、緊急時の対策や意識を高めることが目的。同日は、防災ジオラマ推進ネットワークの協力で、段ボールのジオラマを使用し、佐沼中心市街地の地形について確認しました。河原花歩さん(17)=迫町萩洗=は「自分たちが住む地域の標高の低さに驚きました。有事の対策をしっかりと考えたい」と防災意識を新たにしました。



生徒らは、準備された防災ジオラマに、水色のテープで浸水地域を表示。可視化することで、その危険性を再認識しました。

日本語と文化を伝承

本市からウズベクへ派遣

東和町米川9区出身で青年海外協力隊員の鈴木早希さん(26)は3月22日、市役所迫庁舎を訪れ、熊谷市長に表敬訪問しました。

鈴木さんは、本年3月27日から2年間、青年海外協力隊員としてウズベキスタンのプハラで、日本語や日本の文化などを現地の青少年に指導、伝承します。プハラは、ウズベキスタンの首都タシュケントの450キロ北東に位置しています。大学時代は日本語教育を専攻。幼稚園勤務などを経て、このたび青年海外協力隊に参加を決意しました。鈴木さんは「日本語や日本の文化の素晴らしさを伝えたい」と目を輝かせていました。



ウズベキスタンの説明をする鈴木さん(中)。「伝えるだけでなく、多くを学んできたかったです」と意気込んでいました。